



新校舎の美術館・図書館棟(手前)

巻頭言

令和5年度に予定されている金沢美術工芸大学の新校舎への移転に向けて、美術工芸研究所において幾つかの準備が行われている。新校舎移転後の美術工芸研究所の役割については協議中の事柄も多いが、新たに美術館スペースを備える新校舎では、その役割が大きくなっていくことは間違いないであろう。

まずは、卒業・修了制作等の買上作品を含む収蔵品の調査と確認である。これまで買上作品はそれぞれの専攻に管理が任されてきたが、今後は大学全体の仕事としてその管理保存を行っていく。新校舎への収蔵品の引っ越しを行う際の管理は専門家の手によって行われることになる。また、新校舎においては収蔵庫もより広く整備され、歴史ある収蔵品や新たに増えていく収蔵品に対応し、学生たちの学びに役立てられる重要な資料を未来へと引き継いでいく役割を担う。また美術館以外にもギャラリースペースを多く備えた新校舎は、様々な展示や作品発表などが行われる活動的な空間となり、創作活動のフィードバックを得られる貴重な場となっていくことだろう。

さらに今年度は、美術工芸研究所の研究機能の強化に向けて2名の教授が美術工芸研究所に配置された。法人化以前には美術工芸研究所の専任として研究を行う教員4名を配置した時代もあったが、近年は主に学芸業務と教員研究等に係る事務を担当する職員(学芸員を含む事務職)のみの体制をとっていた。ある意味、本来の美術工芸研究所の立ち位置に再び軸足をおいていくという道を専門家である2名の教員(研究者)が切り開き、本学にとっ

て特色ある研究と、基礎教育の分野において発展していくことを願っている。

もう一つ忘れてならないのは、大学移転の数年後のタイミングとなる柳宗理記念デザイン研究所の移転(予定)にまつわる準備である。現在の尾張町にある建物は老朽化のため耐震など様々な問題を抱えており、柳宗理氏の貴重なデザイン資料の受け入れのためにも、安全な収蔵庫を備えた施設が必要とされ、数年前から候補地などが検討されていたが、尾崎神社に近い「西町教育研修館」(旧石川県繊維会館・1952年築)への移転が決まった。この建物は金沢出身で昭和を代表する建築家であった谷口吉郎氏が設計したもので、金沢市の建築文化発信の一環として保存のための活用が求められていた。

築70年のこの建物も耐震工事やバリアフリーのためのエレベーター設置をはじめミュージアムとして使うための改修が必要となり、同時に谷口建築としての修復も行われることになる。今年度は金沢市による「柳宗理デザインミュージアム(仮称)基本構想検討会」が行われ、具体的な設計等はまだ先のことだが、金沢の歴史的建造物の一つとして活用しながら保存してゆくという素晴らしい計画のスタートに夢が広がる。

金沢美術工芸大学にとっては大きな節目となる現在、次の時代に美術・工芸・デザインの文化の記録を残し、学びのための場を提供する役割を果たすため、美術工芸研究所も今、変化を遂げている最中にある。

美術工芸研究所所長 安島 諭

新キャンパス移転プロモーション展



展覧会名：「新キャンパス移転プロモーション展 教材としての芸術資料—金沢美術工芸大学 卒業・修了制作買上作品 絵画・彫刻編—」

会期：2022年1月4日(火)～1月8日(土)

時間：午前10時～午後5時

観覧料：無料

場所：金沢市民芸術村PIT5 アート工房

主催：金沢美術工芸大学 後援：金沢市

入場者数：276人

金沢美術工芸大学は、金沢大学工学部跡地に建設中の新キャンパスへ令和5年度中に移転する計画である。「開かれた美の探求と創造のコミュニティ」という基本コンセプトのもとで地域や世界に開かれたキャンパスの実現を目指す本学にとって、卒業・修了制作を含む所蔵品の管理と活用の重要性は以前にも増して高まっている。

本学は昭和21年(1946年)の開学以来、卒業・修了制作の買上制度を通じて1,100点を超える優秀作品を収集してきた。これらの作品は教育の歴史とその成果を物語る貴重な財産である一方、作品の大型化や多様化にともなう公開の機会も限られる傾向にある。こうした中、本展は、キャンパス移転に先立ち、日々の“教材”として活用してきた芸術資料を身近に感じていただくため、学内ではなくまちなかで開催する“出開帳”として企画された。昨年度に続き第二弾となる今年度は、卒業・修了制作買上作品の中から絵画・彫刻を中心に36点を展示した。会場となった金沢市民芸術村はかつて紡績工場だった倉庫群の魅力を生かし改修された施設で、吹き抜けの高い天井とむき出しの梁が印象的な展示スペースには大型の買上作品がよく映えて、迫力ある作品の数々が来場者の眼をたのませた。

本展は当初9月の開催を予定していたが「まん延防止等重点措置」の適用をうけて延期となり、1月に開催することとなった。会期中は新型コロナウイルス感染症拡大防止に十分配慮し、来場者には連絡先の記入にご協力いた

だき、検温・手指消毒をおこなったうえでソーシャルディスタンスに配慮しながら鑑賞いただいた。

出展作品一覧

【日本画】

平桜和正「船」(1952年度収蔵)／榎田靖夫「中之島風景」(1964年度収蔵)／松崎十朗「起重機」(1984年度収蔵)／中馬由輔「軌」(1992年度収蔵)／岩田壮平「腹ごしらえ」(1999年度収蔵)／寺西友紀子「ユキコ・ヨーコ・トモコ」(2001年度収蔵)／廣瀬陽子「浮草に」(2002年度収蔵)／松永敏秀「春鏡ⅡA」(2006年度収蔵)／白水悠一郎「呪文」(2008年度収蔵)／吉川友里子「目に涙が浮かぶ風景」(2012年度収蔵)／中田日菜子「蛇」(2017年度収蔵)／工藤彩「海中記」(2018年度収蔵)

【油画】

田保橋淳「群像」(1954年度収蔵)／増田孝「運ぶ」(1961年度収蔵)／益子祥子「女と牛」(1975年度収蔵)／三浦泉「冬日」(1984年度収蔵)／垣内孝則「プロローグ」(1992年度収蔵)／齊藤和志「存在No.2」(1996年度収蔵)／永津照見「思い出の距離から」(2000年度収蔵)／松尾峰昇「『introduction』」(2002年度収蔵)／下出和美「impending darkness」(2007年度収蔵)／中川暁文「最近よく見る嫌な、ちょっと怖い夢の延長のような日」(2014年度収蔵)／菊池美咲「血潮」(2016年度収蔵)／早川璃「Floating around the world」(2016年度収蔵)／堀至以「grow」(2017年度収蔵)／阿知波まどか「終わらない祈り」(2018年度収蔵)

【彫刻】

阿部雪子「女の首」(1951年度収蔵)／田野中康彦「裸婦」(1960年度収蔵)／宮崎豊治「作品」(1969年度収蔵)／富田憲二「女」(1971年度収蔵)／長谷川大治郎「La Femme(女)」(1973年度収蔵)／鈴木典生「子を担う親」(1990年度収蔵)／板谷圭子「『工業廃材と私的廃材から成る卵』」(2001年度収蔵)／伊藤幸久「口付けたくないけどコップ使うのはいや」(2012年度収蔵)／大野紗月「女の子はお尻を冷やしてはいけない」(2019年度収蔵)／織田桃代「隣人の鏡には人工的な罪悪感が映る」(2019年度収蔵)



会場入口



展示風景(日本画、彫刻)



展示風景(油画、彫刻)



展示風景(日本画、油画)

本展では、本学日本画専攻で教鞭を執る松崎十郎(1960～)の卒業制作買上作品「起重機」も展示公開された。金沢に生まれ、金沢美術工芸大学日本画専攻に学んだ松崎は、在学中に現代美術展最高賞や京展市長賞を受賞し、大学院修了の年には日春展で奨励賞を受賞するなど早くから頭角をあらわした。主に日展で発表を続け、2010年には審査員に就任し、その他の美術展やグループ展にも精力的に作品を発表してきた。個展も多数開催しており、2021年には石川県立美術館で個展「REFLECTIONー光の記憶ー松崎十郎展」が開催されたばかりである。

「起重機」は、鉛色の空を背景にして縦横無尽に組まれた鉄骨やベルトをほぼ真横から捉えた構図が眼を引き、さまざまな色の岩絵具を緻密に重ねる仕事によって角ばった柱材の立体感や錆びついた鉄の肌合いまでもよくあらわした力作である。折しも松崎は第8回日展の日本



松崎十郎「起重機」1984年 金沢美術工芸大学蔵

画部門において「海へ」が最高賞である内閣総理大臣賞に輝いたばかりで、その授賞理由となった緻密な描写力と空間構成力の片鱗がこの卒業制作にも窺えて来場者の注目が集まっていた。

卒業・修了制作買上作品は、保管スペースの問題もあり現在は各専攻において管理されているが、新キャンパスへの移転を機に全学的に管理・活用する方針である。本展の企画立案に際しては、過年度に実施した所在調査の結果を踏まえて出展作品のおおまかな選定をおこなったうえで、学芸員が専攻内の保管場所を訪問して状態確認や計測をするなどして準備にあたった。ある意味当然のことではあるが、画像での印象よりも実物のほうがずっと発色が鮮やかであったり、逆に想定していたよりも表面の経年劣化が進行していたりというケースも見られた。また学生が納めた際に制作した巨大な木箱の中にもどのように立体作品が固定されているのか開けてみないとわからないといったケースもあった。制作していた様子把握している専攻教員から取り扱い上の注意点を聞き取ったり、卒業制作展当時の搬入設営を担当した美術品輸送業者と相談したりして対応したが、年々増え続ける多種多様な買上作品の管理の難しさも実感された。しかし、薄暗い学内の片隅に無造作に置かれていた作品が、明るく広々とした展示会場内で多くの来場者に見ただけするという機会を得たことにより、作品のもつ魅力が再発見されると同時に本学の蓄積してきた教育研究成果の発信につながったことは間違いない。卒業・修了制作買上作品の管理と活用については、今後一層力を尽くしたいと考えている。

(在田 有里子)

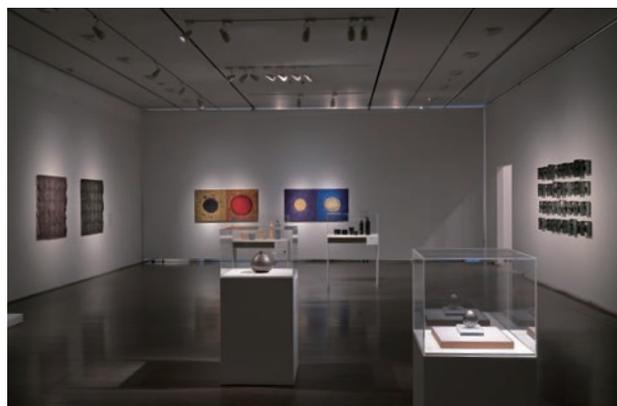
教員研究発表展2021 美大のしごと



2021年11月30日(火)から12月12日(日)の13日間、金沢21世紀美術館において「金沢美術工芸大学 教員研究発表展2021-美大のしごと-」が開催された。本年度はギャラリーA全スペースを会場として確保出来たため、個々の研究成果を提示しやすい鑑賞空間

として構成する事が可能となった。感染拡大防止対策のため開会式セレモニーは開催せず、出品教員による列品解説をオープニング初日に行い、それぞれの研究内容を共有する有意義な場となった。会期中も観覧経路を定める事と人数制限を設ける事で、ソーシャルディスタンスの確保に留意した。展覧会期間中の来場者数は前回の2,364名より倍増し5,519名であった。金沢市民を始め多くの方々に本学教員の研究内容を提示させて頂ける機会となった。教員参加者は青木千絵講師(工芸)、浅野隆教授(製品デザイン)、足立真実教授(工芸)、荒木恵信准教授(日本画)、池田晶一教授(工芸)、石崎誠和准教授(日本画)、石田陽介教授(彫刻)、稲垣健志准教授(一般教育等)、岩崎純准教授(油画)、畝野裕司教授(環境デザイン)、大高亨教授(工芸)、大谷正幸教授(一般教育等)、大森啓教授(油画)、加賀城健准教授(工芸)、神谷佳男教授(芸術学)、樺島脩講師(視覚デザイン)、河崎圭吾教授(製品デザイン)、菊池裕子教授(芸術学)、坂野徹准教授(視覚デザイン)、佐藤俊介教授(日本画)、芝山昌也准教授(彫刻)、渋谷拓准教授(一般教育等)、下浜臨太郎講師(視覚デザイン)、鈴木浩之教授(油画)、鈴木康雄教授(視覚デザイン)、武田雄介講師(油画)、高橋治希教授(油画)、寺井剛敏教授(視覚デザイン)、西本耕喜講師(環境デザイン)、根来貴成教授(製品デザイン)、浜田周准教授(彫刻)、原智教授(工芸)、松崎十朗教授(日本画)、三浦賢治教授(油画)、水代達史講師(工芸)、村中稔教授(製品デザイン)、山村慎哉教授(工芸)、山本健史教授(工芸)、山本浩貴講師(芸術学)、よしだぎょうこ准教授(芸術学)の40名による37作品の出品であった。展覧会に関する企画推進は教育研究センター会議の教職員を中心に行い、参加は教員の自由応募とした。ポスター、フライヤーのデザインは寺井教授に監修を依頼し視覚デザイン学部4年生の表千聖さんが制作した。本学教員に抱く学生から見た印象をマスクという媒体を通して表現し、色調、デザイン共に斬新でインパクトのある仕上がりとなった。会場構成に関しては根来貴成教授と西本耕喜講師が主担当となって、それぞれの展示内容を効果的に魅せる空間設営を提案した。2018年度より継続掲示している各教員の紹介パネルを、本年度も作品と共に設置した。作品タイトル、作品解説、プロフィールを作品と同時に提示する事で見学者の方々に出品教員

の研究内容と人物をより理解して頂く面からみても非常に有効であった。印刷、広報、報道機関との連絡、会場設営に関わる業者との調整、搬出入の手配や管理等、諸々の事務全般は美術工芸研究所の職員を中心に担当し、滞りなく遂行された。会場内は教員各々の研究内容が提示され、金沢美大の「教育」と「研究」に対する姿勢を発信する心地よい空間となった。教員研究発表展は、教育者であり同時にすぐれた美術家、工芸家、デザイナー、そして研究者である教員の研鑽成果を、広く社会に公開する展覧会である。数年後に校地移転も控え、より一層「金沢美術工芸大学」に学外や市民からの注目も高まると思われる。今後も地域に根ざし、市民に開かれた大学を目指す方向性の一環として取り組むべき展覧会である。



(原 智)

美術工芸研究所ギャラリー

■新収蔵作品展2021

本学は開学以来、教育・研究の一環として、美術や工芸、デザイン等の各分野において、歴史的評価が高く、かつ広く市民の共有財産としての価値を有する芸術資料を収集している。本展では令和2年度に寄贈を受けた芸術資料を中心として本学の収蔵品を展示紹介した。また、令和元年度に完了した本学所蔵 曾我二直菴印「架鷹図屏風」修復事業の成果を特別公開した。

六曲一双の「架鷹図屏風」は、修復を完了した屏風に加えて、本紙を取り外したあとの旧屏風もあわせて展示した。蝶番が外れて骨組みが歪み、虫食いの痕が残る古い屏風を目の当たりにすると、修復事業の意義が痛感された。会期中には、荒木准教授・坂野准教授・下浜講師による2020年度教員特別研究「金沢美術工芸大学所蔵『架鷹図屏風』の修理における課題と今後の活用」の研究成果の一部として作成され本学デザイン科の学生も制作に携わった漫画冊子「屏風の鷹がよみがえる」が配布された。また研究所棟2階の展示ホールのガラスケース内にもこの研究内容をわかりやすくイラストや写真で示した展示が行われた。

なお本展の会期は5月28日までを予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う「石川緊急事態宣言」の発出に鑑み、5月12日以降は臨時休室となった。

○開催期間：2021年4月7日(水)～5月11日(火)

計21日間

○入場者数：213人

○主な出展作品

水野源六家資料(古文書、図案等)／佐藤一郎「調色板と電熱器」1976～77年／佐藤一郎「ぬい二十歳立像」2004年／刀銘 越中守藤原高平 元和八年／脇差 銘 越中守藤原高平 寛永三年／曾我二直菴印「架鷹図屏風」 他



(在田 有里子)

■卒業修了制作買上作品セレクション2021

本学では、学部および大学院の卒業・修了制作と論文の中から優秀な作品を選考して購入する買上制度を通じて、開学間もない昭和24年以来、1,100点を超える作品を収集してきた。卒業・修了制作は学生にとっては在学中の研鑽の賜物であり、また教職員にとっては本学の教育

研究の成果としても意義深いものといえるが、約70年間にわたる買上作品の蓄積を美術史的観点からみれば、その当時の芸術動向を如実に反映する歴史的資料としても貴重である。

2017年4月に図書館棟2階に美術工芸研究所ギャラリーが開設されて以降、美術工芸研究所では近年の買上作品を中心に公開展示を行っている。昨年度の買上セレクション展は新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催が中止されたが、通算四回目となる今年は14名を取り上げて開幕した。例年であれば本展の会期中に開催されるオープンキャンパスにあわせてギャラリーも多くの高校生で賑うが、今年度のオープンキャンパスは本展閉場後の9月にオンラインでの開催となった。この意味では新型コロナウイルス感染症の影響を受けたといえる部分もあったものの、若き感性に満ちた力作の数々が鑑賞者を惹きつけることにかわりはなく、展覧会の無事の開催を喜び安堵する声も会期中には多く聞かれた。

○開催期間：2021年6月14日(月)～7月30日(金)

計33日間

○入場者数：189人

○出展者一覧

【学部】川田芙蓉「木の上で」(日本画専攻)／川野風花「山姥とその信仰に関する一考察—高知県山姥神社を例に一」(芸術学専攻)／熊谷八重「日本における『古民家』イメージの形成」(芸術学専攻)／渡辺菜緒「三河漁民風土記」(視覚デザイン専攻)／木下侑樹「FLOW UP-1st Promotion-」(環境デザイン専攻)／野村美沙樹「甘やかな外殻 I」(工芸科鑄金コース)／岸洗実「毎日を毎日重ねる」「心の真ん中」(工芸科彫・鍛金コース)

【修士課程】乙部亮「砂浜」(絵画専攻日本画コース)／橋本充智「野分」(絵画専攻油画コース)／江里口裕紀「クリエイティブなコミュニケーションをサポートするムーバブルファニチャー」(デザイン専攻製品デザインコース)／王麗楠「[転・変]」(工芸専攻漆・木工コース)／岩崎結仁「THE WEAR “座する” 機能を持つニューノーマルな衣服の研究」(デザイン専攻ファッションデザインコース)

【博士後期課程】三輪瑛士「No.21021」(美術研究領域<油画>)／高橋直宏「噛み合わせについて」(美術研究領域<彫刻>)

(以上14名)



(在田 有里子)

美術工芸研究所ギャラリー 平成の百工比照 —染織の素材・道具・技法— —陶磁の素材・道具・技法—

本学が平成21年度から金沢市と協働で着手した「平成の百工比照収集作成事業」にて収集した資料のうち、令和3年度は染織および陶磁分野の資料を本学収蔵の参考作品とあわせて特集展示した。

なお、いずれも令和2年度開催「平成の百工比照—漆工の素材・道具・技法—」および「平成の百工比照—金工の素材・道具・技法—」の後続の展示会にあたる。従来、百工比照収集資料は鑑賞者が収蔵箱から自由に取り出して閲覧できるが、現在は新型コロナウイルス感染症拡大防止策として、接触を伴う資料の閲覧は事前申請制としている。そのため、より多くの資料をご覧いただけるよう、染織、陶磁ともに可能な限り展示点数を増やし収集資料の公開に努めた。また教育的利用の推進として、令和元年度国立民族学博物館公募型メディア展示プロジェクト採択「美術工芸研究所ギャラリーにおける平成の百工比照コレクションデータベースの公開プロジェクト」の一環で設置された「平成の百工比照データベースの閲覧検索用タッチモニター」を引き続き活用し、閲覧希望資料や類似資料に予めアクセスし、データベース上で該当資料を見つけることで、除菌消毒が困難な資料への接触を最小限に留めながら、継続して資料の活用と公開を実践した。

【展示会概要】

■「平成の百工比照—染織の素材・道具・技法—」

「2021ビエンナーレ—いしかわ秋の芸術祭」採択事業

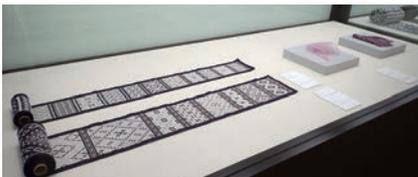
○開催期間：2021年10月4日(月)～11月12日(金)

計26日間

○入場者数：155名

○出展参考作品：《月光衝立》木村雨山 1955年／《花の譜》毎田健治 1993年～1994年／《白地牡丹唐草文様》1955年頃／《白地牡丹文様紅型裂》制作年不明(すべて金沢美術工芸大学蔵)

現代の染織分野における素材の豊かさや、作り手の高度な技巧、多彩なデザインなどを示す資料約110点を展示。日本各地から収集した伝統的な染織物や繊維素材、高度



経済成長期に一層興隆した繊維工業品を展示し、日本の染物・織物の多様性を紹介した。あわせて工芸技術記録4K映像より加賀友禅の制作工程を上映した。

■「平成の百工比照—陶磁の素材・道具・技法—」

○開催期間：2021年11月22日(月)～12月24日(金)

計24日間

○入場者数：157名

○出展参考作品：《赤絵人物文鉢》作者不明 江戸後期～明治時代／《赤絵細文地鳳凰文銀彩鉢》内海吉造 明治初期／《呉洲赤絵金欄手丸紋向付》永楽保全 江戸後期／《色絵山水図平鉢》作者不明 江戸前期／《色絵岩に鳥図平鉢》作者不明 江戸前期／《青手葉蘭図平鉢》作者不明 江戸前期／《色絵芭蕉幾何文角皿》吉田屋窯 江戸後期／《赤絵風渡る壺》北出不二雄 1985年(すべて金沢美術工芸大学蔵)

日本各地から収集した陶磁製品や、主な産地の土見本、成形見本、焼成見本、基礎釉四種を起点とし着色剤や添加剤を用いた釉薬見本、製陶道具など123点を展示し、材料、用いる技法、作る環境の違いなど、産地や作り手によっておのずと異なる特長が一望できる展示構成を試みた。

本学が収集した陶磁製品は、人々の生活に即して作られた質素なものや、鮮やかな上絵で彩られた絢爛なものなど多種に渡るが、それぞれに作り手の優れた技術や、伝統的なデザイン、継承されたユニークな装飾が興味を添えている。あわせて本学収蔵品から江戸時代前期～後期頃に作られた九谷焼や、本学教員であった北出不二雄の作品などを公開し、江戸前期から今日の九谷焼の系譜を示した。また、工芸技術記録4K映像より九谷焼の「色絵磁器」「赤絵細描」「赤絵金欄手」の制作工程を上映した。



(頓宮 佑佳)

柳宗理記念デザイン研究所

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う、「石川県緊急事態宣言」および国の「まん延防止等重点措置」の適用を受け、臨時休館期間(5月12日～6月13日、7月31日～9月30日)を設けるなど、昨年度に引き続き、本年度も通年を通して感染症対策を講じたうえで事業を行った。今後も適切な対策を講じ、展示活動ならびに教育普及の機会の拡大に努めたい。

1. 調査

(1) 経常的調査

柳宗理の執筆、言及論文と発表歴に関する資料およびデータの整理を継続した。

2. 展示

(1) 常設展示(展示資料室1)

柳宗理がデザインした製品のうち現在も販売されているものを中心に約200点を常設展示している。実際の製品を展示・公開し、さらには各メーカーの製品が一堂に会している点は、柳宗理のデザインを知ることができ、来場者の好評を得ている。

(2) 企画展示(展示資料室2)

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、主催企画展示の開催を見送ることとした。

3. 講演会

コロナ禍において様々な活動が制限される中で、本研究ではオンラインでの情報発信を併用し、デザイン文化の発信のために新たな取り組みに着手した。

【OnLine講演会001】「デザインをチューンする。」

・講師：益田文和(本学客員教授)

https://www.youtube.com/channel/UCuMtTM_0osvl3Ff3hnWgvyWA

4. 教育普及

(1) 大学との連携

【デザイン科新入生ガイダンス】

本年度では2年ぶりに本学デザイン科と連携して同科の新入生を対象にガイダンスを行った。

・日程および参加人数：2021年4月20日(視覚D 学生20名、教員1名)、4月21日(環境D 学生20名、教員1名)、4月23日(製品D 学生20名、教員1名)

【展示資料室2の利用】

①「DESIGN MUSEUM BOX『柳宗理のデザインプロセス カトラリーを例に』」

・会期：2021年2月27日～4月3日
・入場者数：968名

・概要：NHK・Eテレの番組「デザインミュージアムをデザインする」関連企画(主催：NHK金沢放送局、金沢美術工芸大学、協力：柳工業デザイン研究会)

②「ペットボトルに代わる飲料提供の提案」

・会期：2021年6月23日～7月1日
・入場者数：221名
・概要：本学製品デザイン専攻4年生と工芸専攻3年生による「製品デザイン演習(四)」 「工芸演習(三)陶磁」の合同授業成果発表展示

③「手を使わない・手の負担を減らすデザイン」

・会期：2021年12月8日～12月17日
・入場者数：323名
・概要：本学製品デザイン専攻2年生による「製品デザイン演習(二)」の授業成果発表展示



デザイン科新入生ガイダンス



①展示風景

(2) 団体見学(2021年4月～、本学学生以外)

・5月8日 金沢工芸子ども塾 18名
・7月17日 金沢市姉妹都市交流委員会 21名
・10月29日 上田女子服飾専門学校 13名

(3) 所蔵品の貸し出し

・川崎市岡本太郎美術館・香川県立ミュージアム「戦後デザイン運動の原点 デザインコミッティーの人々とその軌跡」(2021年10月23日～2022年1月16日 川崎市岡本太郎美術館、2022年4月9日～2022年5月29日 香川県立ミュージアム)《パタフライスツール》、《松村硬質陶器シリーズ》など計39点
・東京国立近代美術館「柳宗悦没後60年記念展「民藝の100年」」(2021年10月26日～2022年2月13日)《黒土瓶》、《出西窯 キャセロール》など計6点

(佐々木 千嘉)

令和3年度 金沢美術工芸大学教員免許更新講習

本学における免許更新講習は例年、「教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項」について、特に美術の最新動向の情報を提供するため実施されている。令和2年度の講習については、新型コロナウイルスの影響により開催を中止したため、今回が2年ぶりの開講となる。今年度のテーマは「空間を創り出す美術・造形」である。講習は小学校(図画工作)、中学校(美術)、高等学校(美術および工芸)の現職教員を対象に、日頃の美術・造形教育の内容について新たな視点やスキルを取り入れるようなプログラムを設定するようになっている。今年度の講習は8月10日(火)～12日(木)の3日間にわたり、18時間の講習を開催した。受講者は石川県内、県外から4人が参加した。

まず10日は田中信行教授(工芸)による全体の基調講演が、そして午後から翌日11日の午前にかけては、芝山昌也准教授(彫刻)による、釘と半田を使って制作する立体造形のワークショップが行われた。11日の午後から12日の午前にかけては、角谷修教授(環境デザイン)によるワークショップが行われ、小さな空間のなかでの展示について実習を行った。また12日の最後には荷方邦夫(一般教育等)による演習、「小グループによる討議—教育への示唆」が行われ、各自が、これからの教育実践においてどのように活かしていくかについて活発な議論が行われた。また、図書館や各コレクションなど、教育活動の資源となる本学の豊かな教育資料の紹介も行われた。

10年以上続いた免許更新制度について、その取扱いが文部科学省内で議論されている最中ということもあり、例年に比べてやや参加者は減少し、定員の15人を下回った。しかし参加者にとって講習内容は好評であり、事後アンケートでも高い評価を得る結果となった。本講習の終了後、免許更新制度の見直しが政府によって始まり、更新講習の実施は今年度をもって終了が予定されている。本学でも、本講習が最後ということになった。

学校教員の研鑽のための研修制度は今後も重要な課題であり、本学が提供してきたさまざまな講習は意義あるものとして高く評価されていることもある。このことを踏まえ、これからも様々な形で美術・造形強化に携わる学校教員に対し、教育の向上に資するプログラムを提供していくよう努力をしていきたいと考えている



更新講習ワークショップの風景

(荷方 邦夫)

科研費申請支援活動

平成22年度より教育研究センターが実施主体となって行ってきた科研費申請活動を、今年度も引き続き実施した。内容は大きく次の二つである。一つは今年度に科研費の応募を検討している教員を対象として実施する前年度の支援活動に関する報告会、もう一つは今年度申請を進めている教員を対象とした応募書類の相談会及び添削会である。しかし報告会については、前年度新規採択の該当教員がいなかったため中止となった。そのため、以下、令和4(2022)年度科研費申請のための応募書類添削会について概要を記すことにしたい。

昨年度に引き続き北陸先端科学技術大学院大学副学長・永井由佳里先生を講師として、下記の通り実施された。なお、例年は学内において対面による添削会であったが、本年度はオンライン開催(Zoomミーティングによる)とした。これは、本学教員による応募が多い研究種目(「基盤B」・「基盤C」・「若手」)の公募・締切時期が内定時期の早期化に伴いこれまでの一ヶ月程度早まったことにより、8月下旬での添削会開催が求められたが、8月中の新型コロナウイルス感染症の県内・市内状況が見通せなかったためである。

本年度は2名の教員より添削会への申し込みがあった。令和3年8月27日(金)13時から、原教育研究センター長、永井講師、申請者の三者がオンラインで面会し、冒頭の原教育研究センター長による挨拶に続いて、永井講師と申請者による個別面談が行われた。一人目の申請者は13:00～15:00、二人目の申請者は15:30～17:30の時間帯で行った。永井講師からは書類作成に当たっての具体的なアドバイスと的確な指導をいただき、非常に有意義な添削会となった。また、オンライン開催という新たな試みもスムーズに決行することができ、日時調整の融通や遠方からの参加が可能となるオンライン添削会は、より多くの参加希望者を引き合わせる仕組みとして次年度の開催方法の検討にもつながった。

昨年に引き続きコロナ禍の影響もあって国内外での研究調査が難しいことも予見された中において、本年度も3件の科研費の応募があったことは、これまで科研費申請支援活動が継続的に実施されてきた成果の一端だと思われる。



科研費活動添削会風景



(青木 千絵)

新収蔵資料紹介：変電用がいし(がい管)2点

「柳宗理の愛したアノニマスデザイン」と題して金沢美術工芸大学柳宗理記念デザイン研究所(金沢市尾張町)のウィンドウディスプレイ内に企画展示され、日本ガイシ株式会社の特別協力を得て2018年3月6日から現在に至るまで本学へ貸与されていた「変電用がいし(がい管)」2点が、令和3年度に本学へ寄贈された。

「がいし」を漢字で表記すると「碍子」となる。「碍」という字は、さまたげる、じゃまをするといった意味をもち、訓読みで「碍げる(さまたげる)」と書くことができる。また「ささえる」という読み方もあり「支える」と同義である。「子」は何らかの機能を果たす物体や道具という意味を持つので「碍子」とは「さまたげるもの」「ささえるもの」といった意味になる。つまり変電用がいしとは、電気を絶縁し、電線を支える器具のことである。がいしの材料には絶縁性や耐熱性にすぐれた磁器やガラスなどのセラミック材が古くから使われてきたが、近年は軽量で耐震性に優れたポリマー製のがいしも生まれ、寄贈元の日本ガイシ株式会社では現在、磁器製とポリマー製のがいしを製造販売している。

電柱や送電用の鉄塔、発電所や変電所で見ることができるとは、電車のパンタグラフを支えているのもこのがいしである。がいしには様々な種類があり、鉄塔の上で送電線を支えるそろばんの玉のような形状のがいしは送電用のがいしで「懸垂がいし」と呼ばれ、同じ送電用のがいしには「長幹がいし」や「ラインポストがいし」などがある。電柱の上に設置されて電柱と電線を絶縁するための小型のがいしは配電用のがいしで「高圧耐張がいし」「高圧中実がいし」などがある。また、今回本学に寄贈された、電線を支え機器や建物の中に電線を引き入れるための大型の筒状の変電用がいしをとくに「がい管」といい、変電所で電線と機器や建物とを絶縁しつつ機器や建物の内部に安全に電気を導く役割を果たしている。内部が電線などを通すための筒状であり、外部には絶縁性能を高めるための笠やヒダが設けられているのがその構造の特徴である。



①PC-111CK (GP900721)



笠形状：下ひだ笠(①裏面)



②PC-70CK (GP900701)



笠形状：普通笠(②裏面)

「手で考え、心でつくる」をカレッジモットーに掲げる本学のデザイン教育において大きな役割を果たしたのが戦後日本を代表する工業デザイナー・柳宗理(1915-2011)であることはよく知られる。柳は1965年(昭和40)、デザイナーとしては脂の乗り切った50歳のとき「アノニマスデザイン展—デザイナーのタッチしないデザイン」(日本デザインコミッティー主催、銀座・松屋)の企画・展示デザインを行い、アノニマスデザインの好例としてがいしを展示紹介した。「アノニマス」とは「匿名の」「無名の」といった意味の語で、柳はのちにファッションデザイナー・三宅一生(1938~)との対談の中でその展示意図を以下のように振り返っている。

「当時はデザイナーがもてはやされ、何でもかんでもデザインの時代でした。勝見勝さんが『デザインの百鬼夜行』と呼んだような。それで、アンチテーゼとして企画しました。(中略)最初にアメリカに行ってイームズ家を訪れた時、理科の実験用のガラスの器に角砂糖が出てきて驚いたことがありました。(中略)名前なしに世の中に使われるデザインが最高。アノニマス・デザインはぼくの最終目的です。」

(「アノニマスデザインに向かって(三宅一生との対談)」、『approach』1998年夏号)

宗理の父である柳宗悦(1889-1961)がかつて無名の工人の手しごとによって生みだされた日常の雑器に美を見出して「民藝」と名付けたのと同じように、いたずらにデザイナーの個性を主張するためではなく、純粋に用から生まれた健全な美しさをもつ製品に宗理もデザインの本質を見出していたのだろう。寄贈にあたり推薦者をつとめた本学製品デザイン専攻の安島諭教授は「通常目の前で見る機会のない大型の碍子であり、純粋に工学的な設計により形作られている造形であることは、いたずらに操作を加えてしまうデザイン作業の現実に対する戒めとして、若き修練者に対して『アノニマスデザイン』を理解する教育的な価値のある存在である。」と述べている。時代とともに産業構造や価値観は変化しており、デザインの手法や技術も多様化する中で本学デザイン科も再編される計画だが、こうした時期だからこそ、学生には本資料といちど向き合ってみることを勧めたい。

参考資料

日本ガイシ株式会社ウェブサイト

製品情報 がい管

<https://www.ngk.co.jp/product/hollow-insulator.html>
「がいし」とは

<https://www.ngk.co.jp/gaishi/>

(在田 有里子)

令和3年度収集美術資料一覧

| ■寄附資料 | ■制作年 | ■作者名等 | ■分類 | ■寸法・素材 |
|------------------------------|-------|--------------------|------|------------------------------------|
| 変電用がいし PC-111CK(GP900721) | 不詳 | 日本ガイシ株式会社 (寄贈元) | 工業製品 | 高さ112cm 奥行110cm 最大径34.5cm 陶器 |
| 変電用がいし PC-70CK(GP900701) | 不詳 | 日本ガイシ株式会社 (寄贈元) | 工業製品 | 高さ77cm 奥行75cm 最大径34.5cm 陶器 |
| 座像 | 1984年 | 石田康夫 | 彫刻 | 高さ38.5cm 幅21.5cm 奥行28cm ブロンズ |

令和3年度修復実績

- ・脇差 銘越中住重清
 - ・刀 銘賀州住兼若
- 白鞘の修復を実施。

令和3年度所蔵作品活用実績

【貸与件数】

- ・学内利用(貸与・特別利用含) 28件
 - ・学外利用(貸与) 8件(24点)
 - ・学外特別利用件数(画像利用等) 14件(35点)
 - ・学外卒業買上作品利用(貸与・特別利用含) 2件(2点)
 - ・市内各所貸与(年度更新) 24か所(68点)
- ※本学主催の企画展等への出品を除く。
 ※令和3年度より卒業作品魅力発信事業にて本学学生買上作品の貸与開始 4か所(4点)。

【美術工芸研究所ギャラリー開室状況】

- ・開室時間 月～金曜日：10時～17時
- ・休室日 土曜日、日曜日、祝祭日、夏季・春季休業期間、年未年始、入学試験期間など
- ・入場料 無料
- ・開室日数 104日
- ・入場者数 714名

まちなかギャラリー事業

【令和3年度 金沢美術工芸大学大学院 博士後期課程

- 1年 研究制作展「大四喜」】
- ・会期 令和4年2月18日(金)～2月24日(木)
 - ・会場 石川県政記念しいのき迎賓館 ギャラリーA・B
 - ・主催 金沢美術工芸大学
 - ・共催 石川県政記念しいのき迎賓館
 - ・後援 金沢市、北國新聞社
 - ・出展者 易 佑安(漆芸)、伊 如(彫刻)
小林美波(彫刻)、晁 男(漆芸)
 - ・入場者数 702人

| | |
|--------------|--|
| 研究所運営会議 | ／安島 諭(研究所長、製品デザイン)、保井亜弓(美術工芸研究所(兼)芸術学) 水野さや(美術工芸研究所(兼)芸術学)、原 智(教育研究センター長、工芸) 渋谷 拓(一般教育等) |
| 教育研究センター | ／原 智(教育研究センター長、工芸)、石崎誠和(日本画)、鈴木浩之(油画) 水野さや(美術工芸研究所(兼)芸術学)、根来貴成(製品デザイン) 西本耕喜(環境デザイン)、青木千絵(工芸)、荷方邦夫(一般教育等) |
| 美術工芸研究所 | ／所長：安島 諭(製品デザイン)、保井亜弓((兼)芸術学)、水野さや((兼)芸術学) 事務局：在田有里子(学芸員)、中山千恵子(事務職員)、門田枝美子(事務職員) 頓宮佑佳(学芸員) |
| 柳宗理記念デザイン研究所 | ／所長：安島 諭(製品デザイン)、事務局：佐々木千嘉(事務職員) |